2017.9.2　GEWANDHAUS 龍ヶ崎ゲヴァントハウス【オリジナルCDコンサート】

大作曲家達の最後の作品を集めて 第1回

プログラム

大作曲家達の最後の作品とはどんな曲だったのでしょうか？　今日はそんな興味深いテーマにスポットを当てた特集の第1回目をお送りします。

マズルカヘ短調は、ショパンが亡くなる1849年に、結核に冒され病床に伏しながら書いた絶筆作品。今日ではスケッチとして残されたものを友人のフランショームが清書した楽譜で演奏されますが、判別が困難だったために省略されていたトリオの部分が20世紀になって復元されています。不安定さを残しながらも半音階的旋律が美しい佳曲です。「岩の上の羊飼い」は1828年シューベルトが死の直前に書き上げた最後の作品。ソプラノとクラリネット、ピアノという珍しい編成で、ソプラノとクラリネットの掛け合いがひとつの聴きどころになっている美しい名曲。最初の4節と最後の1節がドイツの詩人ヴィルヘルム・ミュラーによる「山の羊飼い」と「愛の思い」、真中の2節がカール・アウグスト・ファルンハーゲンの「夜の響き」から引用されています。「レクイエム」は1791年謎めいた作曲依頼を受けたモーツァルトが体調を崩しながら作曲を進めて行くも、結局自らの死によって未完に終わった作品。イントロイトゥスのみ完成されていますが、ラクリモサは9小節目で、キリエとグラドゥアーレは声と通奏低音の声部、サンクトゥス以下は細かいスケッチが残されているだけでした。しかし弟子のジェスマイヤーに全曲完成への指示を与え、補筆完成がなされた事で、モーツァルトが構想した曲の全体像が把握できる作品になっています。作者の死生観が響いてくるような名作。ベートーヴェン最後の作品はアンダンテ・マエストーソハ長調という説もありますが、一般的には最後の番号135の弦楽四重奏曲第16番です。1826年死の5ヶ月前に完成されたこの作品は、後期の四重奏曲の中では最も規模が小さく軽めですが、充実した響きはベートーヴェンしかなし得ない境地を示しています。チャイコフスキーの「悲愴」は1893年2月に作曲に着手、8月に完成し10月28日に初演されました。初演後、弟のデモストと語り合った際に浮かんだ「悲愴」という副題を付けたと言われています。しかしチャイコフスキーは初演から9日後にコレラが原因で急死してしまいます。作者最後のこの作品は、人間の持つ絶望や悲哀、諦めと恐怖など揺れ動く情感を見事に表現した傑作です。　（中川）

＊＊＊＊＊＊＊

フレデリック・ショパン（1810～1849）：
マズルカ ヘ短調OP.68-4
エフゲニー・キーシン(P)
（1994.8.10　ザルツブルク祝祭大劇場でのLive）

フランツ・シューベルト（1797～1828）：
歌曲“岩の上の羊飼い”D.965
バーバラ・ボニー(S)/ウラディーミル・アシュケナージ(P)/ドミトリ・アシュケナージ(Cl)
（1998.8.7　ザルツブルク、モーツァルテウムでのLive）

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）：
“レクイエム ニ短調”K.626～
レクイエム―キリエ―ラクリモーサ―ベネディクトゥス―アニュス・デイ―ルックス・エテルナ
ヘレン・ドナート（ソプラノ）／イングリット・マイアー（アルト）
ヴィエスワフ・オフマン（テノール）／ハンス・ゾーテイン（バス）
カール・ベーム指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団/ウィーン国立歌劇場合唱団
（1975.1.27　ザルツブルク祝祭大劇場でのLive）

＊＊＊ 休 憩 ＊＊＊

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）
弦楽四重奏曲第16番ヘ長調op.135～ 抜粋
ジュリアード弦楽四重奏団
（1997.6.6　カザルスホールでのLive）

ピョートル・チャイコフスキー（1840～1893）：
交響曲第6番ロ短調“悲愴”op.74～第1楽章、第3楽章から、第4楽章
アーノルド・カーツ（カッツ）指揮ザールブリュッケン放送交響楽団
（1993.11.28　ザールブリュッケン、コングレスハレ大ホールでのLive）

★ホームページアドレス　http://www.bekkoame.ne.jp/~hippo/gewandhaus/